

「1年間の活動を終えての自己分析と若者の重要性」

15FF0350 伊藤真吾

① 自分の成長と気づきについて

4月からの1年間の学びを振り返って、自分が疑問に感じたことに対して関心を持つようになったと思う。以前までの自分は、講義等で学習したときに疑問を感じたとしてもその疑問を解決したいという意欲がなかった。しかし、ゼミでの活動を通して疑問に感じるが増え、解決しなければならない状況に置かれた。このような環境で1年間活動をしたことによって、自分が疑問に感じたことに対して関心を持つようになったのだと考える。

また、疑問に感じたことに対して関心を持つようになったため、それに連動して、自ら考えることが以前より増えた。自分のなかで疑問を解決したいという意欲が湧いたからこそ、自分から考えるという力が以前より身についた。

ゼミでの活動はグループでの活動であったため、自分が周りのメンバーから影響を受け、自分から考えて活動しなければならない状況であった。そのため、自ら考えなければならない機会が増え、自分の考える力がアップしたのだと考える。

今日の自分は、ゼミの時間以外の授業であっても、疑問に思うことがあれば自分から調べて理解を深め、そのことについて考えることもあるようになった。

サービslラーニングを通して、自分に身についたことが2つある。それはグループのメンバーと協力することと責任感を持つことである。

グループのメンバーと協力することでは、サービslラーニングの活動がグループのメンバーと考えて実行するものであったため、メンバーと協力することは必要不可欠であった。自分たちのサービslラーニングをより良いものへとするために、グループのメンバーと企画について何度も話し合い、試行錯誤を繰り返した。その結果、グループのメンバーと協力するということが身についた。

責任感を持つということでは、サービslラーニングの活動をするなかで、各メンバーに任された仕事があった。各々に任された仕事をこなさなければならないという思いが自分のなかにあったため、責任感を持つということが身についたのだと考える。

自分は4月からの1年間の活動を1度もさぼることなく活動してきた。この点については、非常に努力したと評価できる。

② 活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

4月からの1年間の活動を通して、1年次のときより地域と関わるが増えた。自分が地域と関わったことで気づくことができたことは、活動を運営する側の人間のなかに存在する若者が少ないことだと思う。

自分がこのように感じたのは、3月に行われた知多半島のバスツアーで訪れた施設の従業員の中に若者がいたという印象がないことと自分のサービslラーニングの活動先の従業員の中でも若者が少なかったという印象があったからである。

運営する側の人間のなかに若者が存在しないとこれまで積み重ねてきた活動を引き継ぐことができなくなる。良い活動を立ち上げたとしてもその活動を引き継ぐ者がいなければ、その活動はなかったことと変わらない。今まで積み上げてきた活動を今後も継続し、より良いものへと変化させるためには、若者を活動に巻き込み、活動に魅力を感じさせることがポイントだと考える。

今の自分と子どもたちの居場所

15FF2679 月城奈々

① 自分の成長と気づきについて

わたしはゼミの活動1年間を通して多くの人と出会い、多くのことを学んだ。そこでは自分が成長したことや自分の未熟さ、実力などを感じることができた。それはゼミの活動で行ったサービ斯拉ーニングやグループワークを通じて得られた。このような経験からわたしは福祉的にも人間的にも1年前の自分とは違った自分になれたと思う。そこで、わたしが成長した点を3つ挙げてみる。

まず1つ目は、コミュニケーション力を高めることができた。わたしの今までを振り返ると、同年代の友人や学校の先生などの関わりが多く、特定の年代や人物に限られていた。サービ斯拉ーニング先のゆめフル武豊スポーツクラブでは、高齢者や子ども、幼児などいろんな年代の方々が利用していた。そして目上の人が多く働いていらしかった。そこで目上の人にはどう接すればいいのか、教室などに参加している子どもたちにはどう話すのかなど、コミュニケーションをとる力や方法を身に着けることができた。これは今後も役に立つ力だ。これからもいろんな方と出会い、言葉遣いや接し方に気をつけていきたい。

次に2つ目は協調性を養うことができた。ゼミ活動の多くをグループで行っていたため、自分の低かった協調性を高める事が出来た。自分の役割を果たすこと、仲間と支えあうことで目標に向かって頑張ることができた。自分ひとりではできないことが多くあった。そこでグループの力の偉大さを感じる事ができた。

最後の3つ目は視点を変えて物事を見たり考えたりすることができるようになった。例えば、福祉という言葉を知ると介護や施設など高齢者や障がい者をイメージしがちだが、福祉教育や居場所づくりも福祉の一部である。福祉はいろんなことに関わっている。サービ斯拉ーニング先のゆめフル武豊スポーツクラブでも、福祉とは縁がないように思えるが、福祉の役割を果たしている。活動している教室などには、体操やヨガなどがある。これは、体の健康の維持とともに老化防止対策でもある。他にも、利用していない方でもスポーツを通じて居場所づくりのために大会など設けている。

以上のように、自分でもわかるくらい成長した部分は多かった。これは周りの人たちのおかげだ。感謝を忘れず、培った力を今後に活かしていきたい。

② 活動を通じて見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

わたしのサービ斯拉ーニング先であるゆめフル武豊スポーツクラブでは、企画として、地域の幼児対象に「うんどうかい」を企画、実施した。そのほかにキッズのフットサル教室の参加やスポーツをする上で重要な知識や事例を学んだ。この活動を通して、逆に利用していない人、利用できない人とはどんな問題があり利用していないのか。子

どもと触れ合うことが多かったので、子供に焦点を当てて考えてみた。

そこで出てきたのは「子どもの貧困」だ。これを調べ、理解し、何かできないかをグループで行った。そこで居場所づくりというのは、地域で行うものなのだった。ゆめフル武豊スポーツクラブにメールして聞いたところ、ゆめフル武豊スポーツクラブでは「基本スポーツを行うことで居場所づくりを提供」しています。クラブを利用していない子どもに関しては、定期的に居場所づくりをしておらず、キッズビーチ大会等の参加を促しています。」とおっしゃっていた。そこから、わたしは利用している人たちだけではなく、利用していない人たちにも居場所づくりの活動をしているのだと驚いた。

しかし、子ども対象の地域でつくる居場所づくりには盲点がある。例えば、小学校のすぐ横に児童館とか、子どもの居場所スペースみたいなのができたとする。その学校の子どもたちは、みんなそこへ行くだろう。学校でうまくいって、学校に居場所がある子はそこにも居場所があるだろう。反対に学校でうまくいってない子はそこにも居場所は見つけにくいと思う。なぜなら、学校の人間関係がそのまま持ち込まれてしまうからだ。わたしは、みんなが来られる場所ではあまり意味をなさないのではないかと思った。

このようにまだ地域で居場所をつくるというのは困難なものだった。しかし、このままにはしてられない。子ども時代というのは特に貴重な時間だ。その時間を有意義に生きてもらうために、誰しもが自分の居場所と感じられる場を作り出していかれたらと思う。

自分の成長と課題

15FF1333 神谷萌絵

① 自分の成長と気づきについて

今回のサービ斯拉ーニングではグループワークを行う機会が多かったことからグループで動く力というもののはついたと感じる。私はそれまでグループワークを行う機会があったが、私はあまり前に出ることができない性格のため、あまり自分から発言をすることができなかった。違ったらどうしようなど余計なことばかり考えてしまい、なかなか自分から何かをすることができなかった。けれど原田ゼミに入り、サービ斯拉ーニング先が決まり、グループワークが多くなっていくうちに自然と発言できるようになっていった。グループが変わらなかったことや、グループのみんなが優しかったことはもちろん原因ではあるが、一番私がグループワークで自分から意見が言えるようになった原因は、私のサービ斯拉ーニング先である「ゆめフル武豊スポーツクラブ」のおかげだと思う。ゆめフルさんは、全て学生である私たちに任せてくれる方針だったため気軽に意見を話せたり、提案を自分から言いやすい環境を作ってくださった。なので同意時に企画力もついたと感じる。自分たちは運動会をすることになったのだが、その企画の配置をどうするか、人数が多かったとき、少なかったときのパターンを決めなくてはならなかったので企画力は以前に比べてついたと感じる。もちろん鳥本さんにもたくさんのアドバイスをもらいながら企画を行ったが、一から十まで全て自分たちで企画して何かを行うというものは初めてだったのでとても新鮮だった。このことは自分の自信にもなると思うし、今後にもつながってくると感じる。また、ゆめフルさんの教室に参加させていただいたときに、子ども達と触れ合う機会があったのだが私はそれまで子どもが得意な方ではなかった。けれど、スポーツを通して子どもと触れ合っていくうちに自然と打ち解けることができた。今では子どもと触れ合うことのできるようなボランティアに参加したいと感じている。

今回のサービ斯拉ーニングを通して自分の可能性を広げることができたのではないかと感じた。今までしたことがないことばかりをすることによって、自分がこれまで出来ないと思っていたものが出来たり、身についていったことで自分の変化に気づくことが出来た。私は今回のサービ斯拉ーニングで自分の可能性を広げることができ、自分が少し成長できたと感じるものになったのではないかと思った。

② 活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

今回のサービ斯拉ーニングでゆめフル武豊スポーツクラブに行かせてもらった。その時に参加させていただいた幼児を対象としたフットサル教室で出会った子どもたちは保育園や幼稚園に通ってる場所が違った。そこで私はゆめフルさんはスポーツをするだけの場所ではなく地域とのつながりを持てる場所でもあるのだと感じた。しかし今地域と

のつながりが希薄になっていると聞いたことがある。そこで限界集落やその対策について調べてみた。限界集落は自分たちが思っているよりもずっと深刻であり、これといった打開策もないと知った。限界集落の対策の中にコンパクトシティや地域創生などがあるが、どれも市民の反対があれば出来るものではない。時に地域を良くしたいと思って行動したことが裏目に出てしまうことだってある。だからこそ私はその地域の特性や人柄などを慎重に自らが足を運んで見に行き肌で感じる必要があると感じた。数字や情報だけを頼りにしてはならないと感じた。今地域には何が足りないのか、何を補えばいいのかを考え行動し市民につなげていくことが大切である。地域住民同士が自分の地域に興味を持ち、地域住民が主体となって動くことの出来る地域が理想なのではないか。私はそうゆうお手伝いがしたいと思っている。そのために今自分が出来ることは、様々な現場に足を運ぶことだと思う。今回のサービ斯拉ーニングでの学びをバネに、もっとたくさんの施設や地域に行きたいと感じた。

地域が抱える課題について

15FF0871 大山克也

1. 自分の成長と気づきについて

今年の一年の活動は主にサービ斯拉ーニングにむけて活動してきた。その中で私が成長したことは自分たちで企画し、運営までするということである。私はサービ斯拉ーニングではゆめフルたけとよスポーツクラブへ行った。私はサービ斯拉ーニングに行く前は福祉とスポーツクラブは関わりがあるのかと思っていた。また、その施設で何を学び、成長することができるのか、期待と不安があった。私たちはそこで企画を任された。施設の人も手伝ってくれたが、企画から運営までほぼ自分たち自身で行った。私はそういう経験を今までしたことがなかった。実際に企画から運営まで携わってみて、たくさんのことを学んだ。今まで学校行事や地域行事などに参加する側だったが、運営するという立場に初めて立ち、企画実施までの流れや裏での準備、構想までに考えるべきことなど初めて分かった。サービ斯拉ーニングがなければ、私は自分たちで企画をするということではできなかっただろう。そのなかでその場の状況に臨機応変に合わせていく対応力も身についた。本番になると企画の段階では想定できなかったことが起きる場合がある。実際サービ斯拉ーニングでも子供が泣いてしまうということがあった。そのときは、どうしたらいいかわからずにいたら親が来てくれ対応してくれた。そこは自分たちの準備不足だと感じた。あらゆるケースを想定する力が足りていなかった。経験不足ということもあるが、事前に準備することがその場の対応力につながってくると感じた。

また、気づいたことは福祉というものの幅広さと地域としてのつながりの重要性である。最初はスポーツクラブと福祉は全く関係のないものだと考えていた。しかし、スポーツクラブも利用する人がいる。その中には健康な若い人もいれば、高齢者や幼児、障害者などさまざまである。その人たちにより良い状態で提供する、というのも一つの福祉の形だと感じた。そう捉えると福祉というのはとても幅広く、まだまだ未完成で常に現状に満足することなく、社会をより良くしようと考えることが必要だと感じた。そこにはまだ気づいていないが、変えていくべき部分もある。福祉の幅広さは限りないと気づいた。また、サービ斯拉ーニングでゆめフルたけとよスポーツクラブの方々の地域を元氣良くしたいという気持ちを感じた。ゆめフルも地域の中の一つの施設。地域の中にあるものである。施設を利用する人も地域の人である。施設を盛り上げることが地域を盛り上げることににつながっていく。それには地域の方々一人ひとりの思いや意識が大切だと考える。そして、地域や施設などでその気持ちを形にする仕組みを作ることが必要ではないかと思う。気持ちはあるけどどうしたらよいかわからない人は少なくないと思う。その気持ちをもっとくみ取ることが必要である。

2. 活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

活動を通して見えてきた課題は地域の方一人ひとりに地域の住民であると意識してもらうこと、そして気持ちを聞くこと、それを行動に移すことだと思った。地域がより良くなることを嫌だという人はいないとおもう。よくしたいが、何をどうすればいいのかわからないというのはもったいない。その声を拾っていくことが地域の活性の発展にもつながると考える。